議題２

平成２７年４月１７日
指　導　第　一　課

平成 26 年度 専門家評価（専門家による第三者評価）の実施結果について

１　目　的

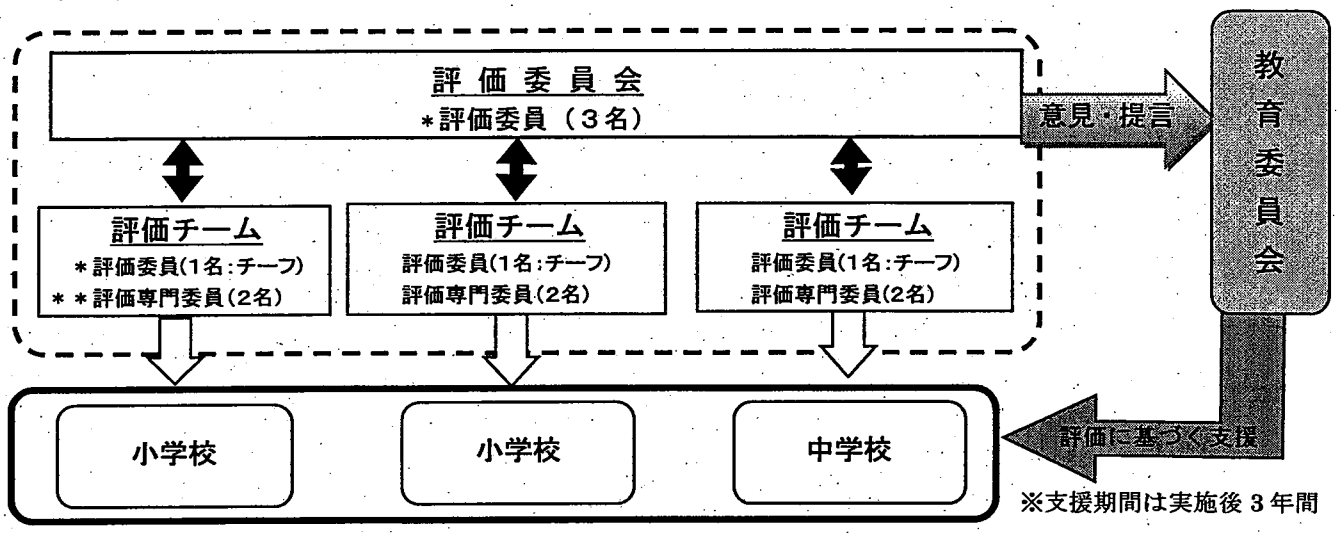
各学校が主体的に行う評価活動（自己評価・学校関係者評価）や教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して、その改善に向けた意見・提言を行うことにより、適切な学校の取組や教育委員会の支援を促進する。

２　対象校

高陽中学校、狩小川小学校、深川小学校

３　実施体制

（イメージ図）



＊「評価委員」
学校評価及び学校経営を含む学校教育について専門的な立場で評価することができる者で、学校及び教育委員会の運営に直接関係がない者

＊＊「評価専門委員」
教育に関する様々な分野の専門家で、学校及び教育委員会の運営に直接関係がない者

(1)　評価委員会

委員名		所属・役職
委員長	林　孝	広島大学　大学院教育学研究科　教授
副委員長	髙妻　紳二郎	福岡大学　人文学部　教育・臨床心理学科　教授
副委員長	曽余田　浩史	広島大学　大学院教育学研究科　准教授

(2)　評価チーム

高陽中	チーフ(評価委員)	曽余田　浩史	(広島大学 大学院 教育学研究科　准教授)
	評価専門委員	財津　伸子	(比治山大学 非常勤講師、元中学校長)
	評価専門委員	平岡　満恵	(元小学校長)
狩小川小	チーフ(評価委員)	髙妻　紳二郎	(福岡大学　人文学部　教育・臨床心理学　教授)
	評価専門委員	瀧口　典子	(元中学校長)
	評価専門委員	弘法　泰英	(元小学校長)
深川小	チーフ(評価委員)	曽余田　浩史	(広島大学 大学院 教育学研究科　准教授)
	評価専門委員	瀧口　典子	(元中学校長)
	評価専門委員	平岡　満恵	(元小学校長)

4　評価目的及び意見・提言

■　高陽中学校

(1)　評価目的

高陽中学校が、生徒との信頼関係の再構築のために取り組んでいる、生徒指導の三機能を生かした授業づくり、特別支援教育の視点から授業改善及び、中学校区で自主的に取り組んできた小中連携を含めた学校運営の状況を評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

(2)　主な意見・提言

学校に対して

①　生徒の最終の目指すところ（生徒の内面の誇り）の明確化

高陽中学校は生徒相互のかかわりを新たに創り出す段階に来ており、生徒たちの内面を耕し、「文化」を育てていくことが望まれる。そのため、生徒の最終の目指すところ（生徒の内面の誇り）を明確にする必要がある。

②　生徒会活動や学校行事や学級などの集団での活動の充実

これまでは、教員と生徒の人間関係づくりを進めてきたので、生徒会活動や学校行事などで生徒相互のかかわりを新たに創り出す段階に来ている。

今後は、生徒会や学級など、集団での活動を積極的に取り入れて、生徒が他者と関わる力や達成感を味わわせること、感動体験等の学習を多く取り入れていくことが、次への段階である。

③　授業研究の推進

授業研究に取り組みたいという教員が多く、今後の方針は時機を得ている。授業の質的な向上を図ること、生徒の主体的な学習活動を育てることが今後の視点であると思われる。

学び合いの授業を目指すために、小集団による協同的な学習を取り入れているが、授業スタイルのあり方などを検証する必要がある。

④　ドリル学習の導入

小集団による協同的な学習と並行して、ドリル学習（繰り返し学習）等も位置付けていくことが、通過率３０％未満の生徒を減らし、学力向上に結びつくと考えられる。

学力テストの結果を学校便りで行っているが、保護者説明会を行い、実態をきちんと説明するこで、家庭学習への協力を得ることや、ドリル学習の導入等が可能となるのではないか。

⑤　地域との積極的な連携の推進

木の宗山憩いの森の千本桜の掃除をはじめ、中学生を「主人公・リーダー」として地域にかかわらせたいという思い・企画を校長は持っている。この思い・企画を地域・小学校と連携して積極的に推進してもらいたい。

教育委員会に対して

①　人事上の配慮

学校は大きな「荒れ」から脱しつつあるものの、まだ予断を許さない状況にある。ゆえに、一定の指導力を備えた教員の配属や、臨採もできうるかぎり少なくする等の人事上の配慮が必要である。

②　安全と清潔・快適な環境の整備

公道を挟んで学校の施設が配置されたり、死角となる場所が非常に多くみられたり、特異な環境である。不審者対応策等については、早急に対応が必要である。

③　地域との積極的・計画的な連携の推進

豊かな人間性の育成や学力の向上に向けて、これまでの学校と地域との協働態勢をさらに活かしていくために、「まちぐるみの教育」活動が充実、強化されるよう、教育委員会としての支援が望まれる。

■　狩小川小学校

(1)　評価目的

狩小川小学校は、これまでに規範性をはぐくむための教材・活動プログラムリーディング校、平和教育プログラム実践協力校の指定を受け、それらの取組を学校経営の重点目標に据え、学校評価の指標づくりを行ってきた。これらの取組に対する客観的な評価及び、中学校区で自主的に取り組んできた小中連携を含めた学校運営の状況を評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

(2)　主な意見・提言

学校に対して

①　**学校運営について**

本校は小規模校であるため、学年経営と学級経営が同じになる１学年１学級の人材育成の難しさが感じられる。そこで、低・中・高学年の部会を、随時に校長出席のもとで、人材育成の場として位置付けることが必要である。

協同学習の理論について理解を深めるために校内研修会を開催する。その研修会に引き続いて、高陽中学校区の小中３校で共通した理論のもと授業研究を進める。

さらに、職員の意識を高めるために、小中３校で目標（中学校区のスタンダード）を作成する。

６年生には、早期に中学校への目標などを立てさせるとともに、頑張る中学生の姿に触れられる機会を設ける。

地域が学校、子どもたちを「地域の宝」として捉え、極めて高い協力度と見守りや期待に満ちている。そこで、ボランティアとして学習環境整備や図書指導、生徒指導を依頼できる保護者を募るなどの取組も考えられる。

②　**授業・生徒指導について**

落ち着けない児童、課題を抱えている児童、荒れた行動をとりがちな児童が少なくなく、教頭がかかりっきりになっている姿や担任以外の複数の職員が対応する姿が日常的になっている。隣のクラスにも意識を向け、騒いだらケアしあう体制を確認する。

全校をあげて子どもたちが落ち着ける状況を作るために、行事の取組や学年を超えて交流する機会を設ける必要がある。

授業中の発言の仕方など、１～６年までの系統だった基本的な学習ルールをつくる。

③　**家庭・地域との関係**

狩小川小学校を会場として開催されている地域行事「狩小川子どもフェスタ」に６年生が合奏で参加しているが、５、６年生との合同行事とし、６年生をよきモデルとする取組も今後考えられる。

教育委員会に対して

①　**「協同学習」理論に精通した外部講師の派遣による校内研修の開催**

現状では「協同学習」が目指されているが、必ずしも十分に理解されていない。本校児童の実態に合わせて、どの学習理論に依拠して進めていくか、職員一人一人が理解して取り組むことが重要である。

②　**管理職及びミドルリーダーを対象とした各研修機会の提供**

中学校区の取り組みを緩やかに統一することにより、小中３校で足並みをそろえる必要がある。

③　**様々な取り組みにあたって、手続きの簡略化**

小中学校の授業交流がスムーズに行えるよう、出前授業等の手続きの簡便化や小中学校の裁量権を拡大する。

④　**特別支援に関して実績のある教員の確保（異動）**

特別な支援を必要とする児童の行動に起因する授業規律の崩壊がみられた。特別支援にかかる力量を持った教員の配置が不可欠である。同時に、中心的な役割を担っていた教員が異動するにあたって、力のある教員を後任として配置することに配慮する。

⑤　クラス編制の特別措置

１年生では３５人学級、それ以上の学年は４０人学級とされているが、本校のような特別に厳しい事情がみられる学校に、このルールを一律に適用することで、その後の教育活動にとって著しい支障が生じることが懸念される。緊急的な手当として２クラスが１クラスに統合されるときに、児童の実態等に応じて従前通り２クラス体制を維持することへの配慮をお願いしたい。

⑥　地域住民が学校の教育活動に参画できるための予算措置及び教職員が地域行事に参加するための予算確保

地域住民の本校児童の見守り活動に係る予算確保や、地域行事への教員参加を促進するための手当支給を検討してほしい。

⑦　地域と学校をつなぐことを専門とする職員の確保

地域との窓口を担う職員がいることで生徒指導や学習指導の状況改善にとって大きなサポートとなることが期待される。

■　深川小学校

(1)　評価目的

深川小学校は、全教職員が共通意識をもって児童に向き合い、統一性のある指導ができる教員集団づくりに取り組んできた。その取組及び中学校区として自主的に取り組んできた小中連携を含めた学校運営の状況を評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

(2)　主な意見・提言

学校に対して

①　学力向上を学校評価に位置付ける

授業研究のあり方を再検討し、学力の積み上げを検討してほしい。

帯タイムの指導計画について、６年間を見通しての再検討が必要である。

保護者に学力への関心をもってもらう工夫も必要である。単純集計だけでなく、数年の傾向を示したり、参観・懇談の場で保護者アンケートをとったりすることもあってよい。

②　児童の最終的に目指すところ（児童の内面の誇り）の明確化

深川小学校は現在「整える」ということに力を入れているが、「整え」た次の段階を想定しながら、「自分たちはこんなことができたよ、もっとこんなことができるよ」と児童の「誇り」を育て、内面を耕していくことが望まれる。

③　授業研究について

道徳の授業を中心に取組むというのが校長の意向である。道徳は学力向上にとって大切な部分であると思うが、道徳のみに特化して喫緊の学力向上という課題が解決できるかという危惧がある。

④　企画運営委員会の充実

企画運営委員会は学校にとって最重要である。回数を減らしたいという教員の声があったが、減らすべきではない。学校の問題解決力を高めるためにも、教頭やミドルリーダーを育てるためにも、意思疎通を行い、校長の考えをしっかりと伝え、各主任から提案が出るように充実させていきたい。

教育委員会に対して

①　人事上の配慮について

これからの学校作りの柱として道徳に力を入れていく予定なので、学校を引っ張ることができる道徳教育推進リーダーに相応しい人材が必要である。

臨採が多く、４０代のミドルリーダーに過度の負担がかかっているため、できうる限り臨採を少なくする等の人事上の配慮が必要である。

②　財政的な支援について

深川小学校にとって授業研究がこれからの学校づくりの軸となる。そのための講師の招聘、県外視察（とりわけミドルリーダーを育てるため）、研修の本の購入のための支援をお願いしたい。